

紹介

Boot, W. J., ed., *Critical Readings in the Intellectual History of Early Modern Japan*, 2 vols. (Leiden: Brill, 2012)

W・J・ボート

ちょっととした大学のちょっととした図書館が利用できれば、実は、私が編纂した *Critical Readings* のような書物は無用です。各論文は雑誌等から取っているのだから、*Critical Readings* を待たなくても読むことはできます。この類いの、必然的に紙幅が足りず収載できない論文が必ずある論文集よりは、批判的な書目の方が役に立つでしょう。フランス語で *bibliographie raisonnée* というものです。その方が網羅的なものを作ることはできるし、読者、特に学生諸君はその方が助かるでしょう。しかし、出版社の *B&B* はそれに応じそうになかったし、正直に言っても、私もこのような目録を作る余裕も勇気もありませんでした。つまるところ、こんな編纂物の真の意義は載せる論文の選択と前書きの主張にあります。この二つで、編集者は自分の意見では近世思想史の研究はどんなものであるべきか、表明

することができます。

この論文集に収集した三三本の論文の半分弱（二五本）は儒教に係わるものです。その内訳は、「中国儒教と日本儒教の比較」（三本）、「教育」（三本）、「個々の儒者」（九本）であり、「個々の儒者」の九本の内、三本は荻生徂徠に関する論文です。次の部門は「国学」（五本）、「蘭学」（四本）、「宗教」（三本）、そして、「西洋との出会い」（五本）です。選択に当たって、なるべく実証的な論文に絞って、取り扱っている一次史料から問題意識が生まれてくるものを選びました。Hegel とか Marx とか Bourdieu とか Foucault とか (Benedict) Anderson とか の説を日本に応用する論文は載せないことにしました。それぞれの善し悪しがあることを別にして、これらの説は皆、西欧のある時期のある事情を研究してその研究結果を普遍化したまでのものです。しかし、事態 A を抽象化した形の説 A が全く関係のない事態 B に当てはまる筈はないから、あまり意味はありません。せいぜい、マルクスのお蔭で経済的データが研究されるようになったように、新史料に目を向けさせる効用があるくらいでしょう。もちろん、過去には日本の歴史的経験を普遍的なものに表現するためにそのような理論が使用されたこともあるでしょうが、それは間違いにしか思えません。比較は結構ですが、その場合、日本のことを先ずは中国（朝鮮）に比較したほうが妥当に思われます。中国の文化と文明こそが、日本が最も直接的な影響を受けたものだからです。近代以前に、中国に

比べてほとんど影響がなかった西欧とは、構造的比較のようなことしかできません。同じ普遍的な歴史過程を辿ってきたはずなので比較すべきだというのは、説得力に欠けている前提です。

この論文集の構成の背景には上記のような思惑があります。その上で、編集者の特権を利用して、前書きではあえて持論の幾つかを展開しました。愚見の一つは日本近世思想史の定義に係わるものです。一九七〇年代前半、京都大学に留学するときに、研究室の仲間の一人が「日本には政治思想しかない」と言いました。近世の儒教を念頭においての発言でしたが、「そんなことをどうして言うのだろうか」と、その時に思ったことは鮮明に記憶に残っています。少し考えてみれば、近世の日本に儒教以外の思想や宗教があったこと、それらは必ずしも政治思想に尽きるわけではないこと、儒教は日本では政治思想と見なされがちではあるが、韓国では「礼儀思想」と見なされるのが当然であり、中国では「道徳思想」とみなされていることぐらいは、分かるはずだ、と思ったのです。愚見では、近世思想は必ずしも政治思想に尽きるのでなく、また必ずしも儒教だけからなっている訳ではありません。国学・蘭学はもちろん、宗教等も取り入れて幅広く研究し論じることが必要です。仏教は江戸時代中、言ってみれば、国家宗教であり、皆が信じたかどうかを別にして、仏教の知識が全社会に浸透していたのに、仏教を無視して近世の思想を語ることはキリスト教を無視して近世ヨーロッパの思想史を語るようなもので、間違いにしか思えま

せん。

なお、抽象的な「思想」よりは、その思想を創作した知識人をこそ思想史研究の中心に据えたほうが、この「思想」がどういふ条件の下に作り出され、どんなニーズに答えようとしたか、よく分かると思います。このような目で見れば明らかのように、近世日本の知識人は、何時の時代の何処の知識人と同じように、生計を立てる必要に直面していました。個人的財産がない限り、学問を教える報酬を得るかパトロンからの助成か本を出版して利益を得るかの三つの方法しかありません。資産家は山片蟠桃ぐらいであったでしょうし、あるいはその他に俸録で暮らす田安宗武とか渡辺華山とかのような、高級武士もいましたが、圧倒的多数の知識人は私塾を開いて学問を教え、授業料で暮らしていかなければなりません。あるいは、大名に仕えて俸録をもらったり経済的支援をねだったりするのです。あるいは、海保青陵のように塾も開かず、諸国を歩いて招待されたら講釈をするという知識人もいました。近世の日本には印税はなかったもので、本の出版は多くの場合収入源ではなく、後述するように、むしろ自己宣伝の手段と見なさるべきだと思います。そして、この三つの方法でまだ生活を営むことに無理があれば、傍らに医者として開業する手がありました。儒医は江戸時代初期からあります。国学者として名をなしましたが、本居宣長もその一例と見ても差し支えはないでしょう。

教育も出版も一応、自由市場に任されており、幕府は関与し

なかつたのです。誰でも塾を開いてよいし、生徒さえ集まれば好きなことを教えることはできました。逆に、生徒は学費さえ払えたら、好きなだけ好きな塾に通うことができました。入試もなければ卒業もなく、カリキュラムを認定したり、教える時間数を決めたり、学位の内容を定めたりする文科省は何処にもありませんでした。この点では、近世の日本の教育はユニークな実験であつたと言つても過言ではありません。なるほど、全く制限がなかつたわけではないが、思想、とりもなおさず知識人の弾圧は滅多に起りませんでした。その僅かな例は、十七世紀の熊沢蕃山と山鹿素行、十八世紀の竹内式部と山県大武と林子平、十九世紀の高野長英と渡辺崋山ぐらいでしょう。これらの人物の共通点は何かというと、幕府の権限である国策や外交について発言し、幕府の当局の神経を逆なでしたこと、そして、数多の浪人を自分の塾に集めたことです。これらはやはり避けるべきだと、一般の知識人には分かつていました。強いて御政道に触れるのであれば、その意見を写本で広めて、製版にしてはならない、というのは常識だつたでしょう。換言すれば、自己検閲という傾向が必ず存在しており、我々研究者としてはそのことを常に念頭に置いておかなければなりません。

近世の知識人のなすことは世の常のごとく、教授や講釈以外に執筆でした。典型的な仕事は典籍の校訂、典籍の注釈、典籍の翻訳と応用、そして、典籍を読むのに役に立つ参考書(辞典、索引等)を作ることでした。ヨーロッパの知識人がローマとギ

リシアの古典、または聖書の研究に携わっていたように、日本の知識人は、漢学者ならば四書五経、国学者ならば日本の古典の研究に携わっていました。社会的立場上、この聖典の研究こそが彼等の存在理由でもあつたので、それだけにその研究と宣伝と応用に励んでいました。寛政の改革に際して、林家の家塾の幕府直轄化、そして、和学講談所の設立で、この主張は幕府に認められていわば国策となり、官版等の形で幕府が出資さえするようにもなりました。

聖典の事業の外に詩文も作られ、特に儒者の場合には文集が重要視されてきました。他の書物と同じように、文集が印刷されるかどうか、本人の経済力次第であつたでしょう。私の印象ですが、学術的な書物、または漢文で書かれたテキストならば、本屋は自分の費用で出さずして、著者に費用を受け持つてもらうのが普通だつたでしょう。著者はこんな場合、パトロンに当たつてみるか、塾生ならびに前塾生に頼むはかなかつたでしょう。だから、雑な版も多いし、版本を作るのではなく、コストの安い木活字版が写本のまま出回っているものも多数ありました。

最後のジャンルは論争でした。論敵を批判する時は、もちろん、自分が正義を代表しているかのように構えるものでしたが、狙いの一つは、自分の塾の宣伝であつたでしょう。やはり、生徒の納める学費で暮らしている以上、自分の存在をアピールする必要がありました。有名人あるいは有名な図書を批判するこ

とはその方法の一つでした。しかし、配慮すべき限界はありました。あまり派手にやれば、例えば徂徠のように「我一人のみ漢文ができる」という調子に学者仲間を貶したりすれば、反発が必然的でした。あんな批判では、儒者全体が廃ってしまうから、学者社会から除け者にされるのは当然でした。徂徠は他にも問題はあったが、儒者の共同体の一員であることを忘れたのは明白なミスでした。

自分の存在をアピールするには人と違うことを言うのが一番ですが、あまりにも突飛なことを言うと同効果です。近世日本の知識人にとっても、コンセンサスを保ちつつ、交渉しながら、自分の意見を少しずつ提出することが必要なコツでした。これは東西を問わず同一のことで、現代の学問でも変わりません。なお、私塾と藩校はこの点、微妙な違いがありました。藩校の先生は原則として藩臣であって歴代の俸録を貰いながら教えている人々でした。生徒を集める必要もありませんでした。藩の武士は命令されて、藩校に通うように義務づけられていました。だから、私塾の先生のように、自己宣伝をする必要もなく、出版も論争も二の次でした。

最後に、知識人は誰を指すのか、思想とは何か、という定義の問題が残っています。ヨーロッパでは知識人の最低条件はラテン語ができることであつたように、近世の日本では漢文の読み書きができることでした。その上、それなりの好奇心、モノを知る意欲、そして、その知識を人に伝播する意欲が必要です。

単なる読書家を知識人と言っても差し支えはありませんが、史料として残るのはせいぜいその蔵書目録なので、思想史の研究の対象にするのは難しいと思われれます。

思想とは人間が社会の中で体系的な思索をしたものです。それをその時代の常識に照らしながら把握することが必要です。つまり、今の常識から見ると迷信か誤解と受け取られる側面を無視して、今の常識で「正しい」と思われる側面だけを取り上げるのは失策です。自然科学史の研究にはよくあることかもしれませんが、過去の思想を歴史的に理解する道とはいえません。現代の大学の講座別に知識人の活動領域を分類することも間違っています。ある思想家を儒者あるいは国学者あるいは詩人あるいは物産家あるいは狂歌の先生と決めつけて、その人の他の分野における活躍を無視するのは誤解を招きます。思想家をありのまま、包括的に理解することが必要です。同じ理由で、思想と宗教の区別も危険です。江戸時代の知識人は漢文を習った以上、皆、四書五経の案内がありました。しかし、同じく子供の時から仏教と神道に晒されていたので、それらのことも一応の知識はありました。そして、これが宗教で、あれが思想だ、という風には区別していませんでした。我々が区別すると、それだけ、歴史を曲げることとなります。それはやはり、思想家としてほならないことです。

(ライデン大学名誉教授)